人物で語る日本デンマーク

④ 山崎延吉（のぶきち）Ⅲ

山崎延吉の著書は四十一冊にのぼる。中でも『農村自治の研究』『農家の経済』『農村計画』『農民道』などは、彼の農政家としての歩みの中で生まれたものであり、農業の近代化、農村の振興、農民精神の高揚など、新しい農村をデザインしたものである。彼の考えを受け入れ、いち早く農業の近代化を進めていった碧海郡地方が日本デンマークとして全国から注目されるようになるのである。

山崎延吉は、著作活動の中で「我農生（がのうせい）」のペンネームを多く使っている。「我農生」とは、「我は農に生まれ、我は農に生き、我は農を生かさん」という農民とともに生きようとする彼の心情を表したものである。

一九一六年（大正五年）、山崎延吉は、三重県鈴鹿郡石薬師村（現在の鈴鹿市石薬師町）に四町歩の土地を購入し、愛知県立農林学校の卒業生を農場主任にして開墾を進めた。この農場は「我農園」と名付けられ、年々入植者も増えていった。この地は台地上にあったので、畑作地として野菜の栽培や家畜の飼育が中心となった。夏はイモ、スイカ、カボチャ、キュウリ、秋はダイコン、ハクサイ、冬はムギ、それに養鶏、養豚、酪農と年中仕事があり、収入を得られるよう多角経営をした。そして、産業組合を組織し、近代化農業を進めたため、三重県内では有数のモデル農村と言われるほどになった。この我農園の経営は、農に生きたいという彼の願いでもあった。

一九二三年（大正一二年）の関東大震災以後、社会不安の中で小作争議が頻発し、農民の農村離れが進んだ。山崎延吉は、農民の本質を理解し、農民の使命をまっとうする真の農民を一人でも多く農村に定着させる必要から農民道を唱え、各地で農民道講習会を開催した。そして、一九二九年（昭和四年）、彼は、我農園の中に農民道を実践するための教育機関として、「神風義塾（しんぷうぎじゅく）」という農民道場を設立した。入塾者は一年間寄宿舎で共同生活をしながら農業技術を習得し、農民道の修業をした。農村の経済更生計画が進む一九三四年（昭和九年）、愛知県でも岡崎市美合町に追進（ついしん）農場が、安城市里町に安城農道館が建てられ、勤労青年の養成が図られた。神風義塾は、一九四四年（昭和一九年）、戦争のために入塾者がいなくなり閉鎖されたが、十六年間で百二十一名が修了していった。彼がめざしてきた農業の近代化も、戦時中の食糧増産という掛け声の中で後退していくこととなった。我農園も一九四六年（昭和二一年）、戦後の農地改革の対象となり、その姿を消した。

一九五四年（昭和二九年）七月十九日、午後八時十五分、山崎延吉の生涯は終わりを告げた。八十二歳であった。

山崎延吉は、生涯を通じての教育者であった。農民と農村のよき指導者であり、農業の近代化をめざし、農民の立場に立って農政の方向を指し示した。それが農民に慕われ、「農民の父」と言われるゆえんである。

文　三上裕保

▲神風義塾記念碑
（三重県鈴鹿市石薬師町）

▲我農生の書「気魄」